

コロナ渦の川柳・作文に関する高松市剣道連盟賞発表

高松市剣道連盟会長 山神眞一

令和2年5月6日にコロナ感染に関する緊急事態宣言が延長される中、会長メッセージをホームページから発信致しました。その際、併せてコロナ渦の状況下の中での剣道に対する川柳と作文の募集をお願いしました。その結果、5月末日において、川柳は、幼児・小学生83件、中学生76件、高校・大学生63件、保護者・指導者43件、また、作文は、幼児・小学生13件、中学生10件、高校・大学生31件、保護者・指導者7件の応募がありました。応募していただいた皆さん、ありがとうございました。

大変遅くなりましたが、高松市剣道連盟賞をホームページにて発表致します。尚、表彰作品の中からいくつかを剣道時代8月号の「川柳・作文から魅力を探る」と題した私の連載の中で紹介させて頂きました。

高松市剣道連盟に所属されている幼児から小学生、中学生、高校生、大学生、一般、保護者、指導者にいたるたくさんの皆さんの剣道に対する想いを川柳と作文に託して表現していただきました。どの作品もご自分の経験・体験に基づくものであり、コロナ渦で剣道が思うようにできない中、剣道ができることの幸せを感じる気持ちや剣道の魅力が素直に、真摯に伝わってくるものばかりでした。改めて生涯剣道としての剣道の意義を再認識することができました。

高松市剣道連盟の皆さんにおかれましては、剣道が再開されていますが、シールドにマスク着用という厳しい条件での稽古です。また、8月、9月の稽古は、熱中症の危険性もあります。コロナ渦の新しい生活様式を遵守しながら、体調を十分管理して無理をしない稽古を心がけて欲しいと思います。

秋以降の大会等もなかなか実施できない状況にありますが、今回応募いただいた川柳や作文を読み返して、コロナ渦でできる剣道との関わり方を今一度一人一人が見つけていこうではありませんか。

皆さんとの再会を心待ちにお互いに日々精進してまいりましょう。

コロナ渦期の川柳・作文の表彰作品について

【剣道に関する川柳】

◎幼児・小学生の部

- ・杉 麻央 (年長・直島スポ少)「ヒーローの まねしてにぎる ちいさなしない」
- ・河野祐一郎 (小学2・屋島スポ少)「見ていてね 素振りするから おばあちゃん」
- ・黒川 晴生 (小学2年・屋島スポ少)「父さんと 並んで素振り 習慣に」
- ・小川 千沙 (小学2年・檀紙体協剣道部)「早く行こ 今日も楽しい けんどうぶ」
- ・井下 葵 (小学3年・自習館)「いつもより おいしいごはん けいこあと」
- ・左達 蒼生 (小学4年・香川第一剣友)「なかまとの すぶりのけい古 きずなだよ」
- ・三好 泰輔 (小学4年・十河スポ)「はりつめた 静けさの中の きんちょう感」
- ・吉田 大志 (小学6年・光龍館)「剣道は わたしの誇る 人生道」
- ・山本 涼真 (小学6年・揚武館)「私生活 三密からも 間合きる」
- ・松本 琉郁 (小学6年・仏生山スポ)「稽古なく 防具も自粛 寂しそう」

◎中学生の部

- ・泉 周吾 (木太中1年)「刀身に 終息願い コロナ打つ」
- ・中野 雄太 (玉藻中1年)「コロナ休校 稽古仲間の 大切さ」
- ・佐藤 克樹 (附属高松中1年)「休まない 跳躍素振りで 次ねらう」
- ・川崎 響輝 (桜町中1年)「剣道で 希望も夢も 勝ち取ろう」
- ・溝渕 一 (香川第一中2年)「竹刀ふり 我的手見れば まめばかり」
- ・川東 さくら (太田中2年)「素振りする あこがれる人 なりたくて」
- ・黒川 歩未 (協和中2年)「攻めぬなら 心もからだも 場外だ」
- ・椎崎 海里 (龍雲中2年)「耐え忍ぶ 武道のこころ いまここに」
- ・浦上 翔 (紫雲中3年)「感覚を 忘れぬうちに タイヤ打ち」
- ・大山 敬太郎 (屋島中3年)「竹刀振り 徐々に感じる 春の風」

◎高校・大学の部

- ・恒石 武侍 (高松中央高校1年)「面越しに 見えるアイツも 震えてる」
- ・福田 康希 (高松商業高校1年)「声なしで 静かに家で 素振りする」
- ・玉井 綾乃 (高松商業高校2年)「先輩の 気持ちと共に 来年へ」
- ・溝渕 玲菜 (香川中央高校3年)「心技体 基本があるから 美しい」
- ・藤原 海 (高松中央高校3年)「一振りに 思いを乗せて 我武者羅に」
- ・十川 大夢 (香川大学1年)「面取った 兄と勝負の エアー剣道」

- ・真野 愛弓 (香川大学2年)「剣道部 十人十色 そこが好き」
- ・福原 徹也 (香川大学3年)「自粛期間 魅力深まる 剣の道」
- ・嶋村 健 (香川大学3年)「今のうち きれいな点検 剣道具」
- ・氏部 桃香 (香川大学4年)「皆の夢 責任取れるか コロナさん」

◎保護者の部

- ・椎崎 枝利子「君を待つ おかれた面が 見る道場」：仏生山スポ少
- ・佐達 由佳里「子の稽古 見ながら母も 成長を」：香川第一スポ少
- ・佐藤 友子「口出しは 見取り8年 金メダル」：亀阜スポ少
- ・河西 寛代「小手匂う 我が子がんぼる 証(あかし)かな」：檀紙体協剣道部
- ・中村 紀与子「忘れない コロナと戦い 過ごした日」：三木スポ少
- ・藤島 智美「剣道着 一番好きな 我的姿」：香川第一スポ少

◎指導者の部

- ・松本 若菜「コロナ渦の 見取り稽古は ユーチューブ」：仏生山スポ少
- ・紺田 強「竹刀(ちくとう)の 手入れ万端 コロナ去れ」：国分寺スポ少
- ・伊丹 洋「剣道も コロナと同じ 気を抜くな」：高松第一スポ少

『剣道に関する作文』

◎小学生の部

- 中根 すず (自習館・小学6年) 題名「今できること」

私は、お風呂上がりにお父さんと『ストレッチ』をしています。剣道でケガをしにくい体づくりが目的です。お父さんは、昔スノーボードをしていました。その時にスノーボードを終えて真っ先にすることは、『ストレッチ』だと言っていました。だから、大ケガを1度もしたことがないと聞き、びっくりしました。そして見せてもらおうと、『べったり』と手が床について、驚きました。なぜならお腹はタヌキのように『ポンポコリン』でお父さんのストレッチ姿を一度も見たことがなかったからです。私は、『またわり』や『バランスディスク』に乗ったりして、『股関節』を柔らかくしています。でも、私の体はとても固く、床にぎりぎり指先が着くぐらいです。また、ふくらはぎが痛くてたまりません。それでも、お風呂上がり『ストレッチ』をすると、手のひらまで何とか床に着くことが出来ます。ただ、次の日には、元通りになっていて、なかなか柔らかくはなりません。もっと、回数を増やそうと、朝やテレビを見ながらしています。また、『バランスディス

ク』に乗って右足を上げて20本素振りをしています。バランスがくずれて落ちたら、また1からやり直しです。バランスがくずれないようにすると、むずかしくて、笑ってしまいます。でもだんだんと一人でやっていると楽しくなくなってきて、やる気がなくなりました。そんな時テレビを見て、大人や医療関係者の方々が働いているのを見ると、頑張っ
て働いているのに、子供がダラダラしてはダメだと思いました。大人がこうして働いて
いるから、テレビを見れたり、いつもの日常生活を送れるのだと、自分でも気がついて
いませんでした。だから、一人であきらまなくても、やれることは続けようと思いました。
いつか日常に戻り、みんなと一緒に思いっきり剣道ができる日を楽しみに日々頑張りま
す。

●岡西 奏空（高松第一剣道スポーツ少年団・小学6年）題名「剣道とぼく」

ぼくの家族はみんな剣道をしていて、小さいころから試合や練習をたくさん見ていま
した。試合や練習の後にお互い礼をして楽しそうに会話をしているのを見て、剣道はたく
さんの人と友達になれると思いました。

一年生になってから剣道を始め、学年全員に「剣道をしようよ。」と声をかけましたが、
みんな他の競技をしていたり、「剣道を知らないのでやらない。」とことわられました。その
時、ぼくは剣道を強くなってみんなに知ってもらおうと思いました。

毎回の練習では、人より大きな声を出すことや一回でも多くけい古をするようにがんば
っていますが、なかなか強くなれず僕のスポ少は人数が少ないです。

だから、試合に出るときは他のチームの人と一緒に出る事が多いです。その時に、色々
をしたり、剣道を教えてもらったりして友達が増え、今では県内や県外だけでなく海外の
人とも剣道や会話をして友達になれています。

これからも剣道仲間を増やせるように、日々の練習をがんばり、早くお父さんに勝てる
ようにたくさんの人と練習をして強くなります。

◎中学生の部

●香川 大樹（香川第一中学校3年）題名「僕と剣道」

僕が剣道を始めたきっかけは、小学校三年生の時に、両親からすすめられたからです。
剣道を始めた頃は無理矢理やらされている気持ちが強く、剣道を好きになれませんでした。
僕は小学生の時に一度剣道から離れる時期がありました。ですが、その時になぜかもう一
度仲間たちと剣道をしたい気持ちが強くなり、中学校でも剣道が続けようと思いました。
中学校で剣道部に入部してすぐに先輩たちの剣道の強さやかっこよさにあこがれました。
そして、自分も先輩たちのように強くなりたいと思いました。

先輩たちが引退し、部で最上級生になりました。僕も先輩たちのように強くなりたいと
思い、試合に勝てるようにがんばろうと思いました。しかし、なかなか思うようにいきませ
んでした。悔しい経験ばかりが増え、自信がなくなる毎日でした。そんな時に僕を支えてく

れたのが仲間です。自分にできないことを仲間が助けてくれたり、自分にアドバイスをくれたりしてくれることで僕ももう少しがんばろうと考えることができました。その時、僕が剣道を続けていた理由は試合で勝つことだけではなくて、仲間と助けあいながら頑張れることに魅力を感じていたことに気づきました。そのことに気づいたおかげで、試合の結果に一喜一憂することなく、剣道のことをもっと好きになることができました。

新型コロナウイルスの影響で様々な大会が中止となりました。しかし、剣道は大会で勝つことが全てではないと思います。僕は剣道の選手としては強くありません。ですが、仲間と一生懸命にがんばった全ての思い出が自分にとっての剣道の魅力です。これからも大好きな剣道を続けていきたいと思います。そして、僕と最後まで一緒に練習をしてくれたなかまに「ありがとう。」と言いたいです。

●澤田 ひかり（協和中学校2年）題名「剣の道はまず、己に克こと」

コロナウイルスによる休校期間中、対人での稽古はできませんでした。素振りやランニングなど、限られたことしかできない期間でした。まさに、弱い自分が試されている期間だったように思います。

これまで、剣道部での稽古とスポーツ少年団での稽古の時間が、当たり前のように、私の学校生活の大半を占めていました。夏の稽古は、気が遠くなりそうなほど暑く、苦しく時間が長く感じ、冬の稽古は、足の裏がひび割れ、それが痛くて辛いなあ、とっていました。特に打ち込みの稽古がきつくて、毎日、気持ち負けそうになりながらも、他の子が頑張っている姿を見て、「休まない」と心に決めて、取り組んできました。

スポーツ少年団の「誓いの言葉」の中に、「剣の道はまず、己に勝つこと」という言葉があります。私は、その意味は、「きつい稽古を負けずにやれば、強くなる」ということだと理解していました。自分は、部活やスポーツ少年団の稽古が辛くても続けてきたので、そのうち強くなれると思っていた。

しかし、ただ「与えられた稽古に立ち向かうことだけが自分に勝つことや、強くなれることではないのではないか」とこの休校期間中に考えるようになりました。先生や親の目がなければ、素振りやランニングをサボりそうになる自分・・・。「己に勝つ」とは、簡単にできることではないのだと気づかされました。誰の目がなくても、自分で考えて、自分で課題を作って取り組めることが「己に勝つこと」だと思いました。そして、当たり前になっていた剣道の稽古の時間が、今は一瞬一瞬、貴重な時間であると思うようになりました。

◎高校生の部

●吉田 千玲奈（高松商業高校3年）題名「マネージャーとして」

私は中学校から高校まで剣道という日本のスポーツと関わってきました。中学校では選手として、高校ではマネージャーとして違う視点から剣道と過ごしてきました。その中で感じたことがあります。選手として強く感じたことは、一つ一つの技に気持ちを込めて更

に道具にも心を込めて扱うということです。これに関してすごく丁寧で素晴らしいと思いました。特に竹刀をまたいだり、技の内容は臨場感、緊張感を持つのはとても大事なことだと思いました。マネージャーとして感じたことは、礼儀が正しいことや動作や声がそろっていることです。日々の練習風景や練習後の風景を見るとどんな時も言葉遣いや挨拶が良くできていて、見ている側もとても気持ちよくなります。練習中に声がそろっていたり、並んでいるときの列をそろえようと意識しているところを見たりしていると剣道はチームワークも作っているということを感じました。

これらを通して剣道と関わってすごく良かった、得をしたという気持ちです。生活面においても自分自身とても成長しました。更に困っていたり悩んでいたるときにいつも助けてくれるのは男女問わず剣道部の仲間です。普段は恥ずかしくて言えないけれども感謝しているしみんなのが大好きです。新型コロナウイルスの影響で総体もインターハイもなくなりました。みんなで決めたインターハイ出場という目標もなくなって悲しんだり戸惑ったりしていると思います。そんなときだからこそマネージャーとして心の支えになったり今できることをしたりしたいです。

改めて剣道は人間を創る昔からの歴史ある武道だと感じました。たくさんの人に良さを知ってほしいです。受験生で剣道から離れても礼儀や規則正しい生活、成長を大事にして一日一日大切に過ごし、素晴らしい人間になりたいと思いました。

●小島 颯太（高松中央高校3年）題名「剣道の大切さ」

私は小学三年生の時に剣道を始めました。きっかけは、地元スポーツ少年団の体験へ急に連れて行かれたことです。そして、いつの間にか入団することが決まっていました。初めは練習もすごく楽しく、剣道が好きでした。しかし、学年が上がるにつれ、自分の力が思うように上達せず、剣道があまり好きではなくなっていました。

小学校を卒業し中学校に上がると、他に入りたい部もなかったの、軽い気持ちで剣道が続けようと思い、剣道部に入部しましたが、中学校の部活はそんなに甘くありませんでした。毎日練習が厳しく、家に帰るとご飯も食べることが出来ないくらいしんどい時もあり、本当にきつくて何度も辞めようと思いました。練習を続けていく中で、少しずつ練習試合などで勝てるようになってきました。同時に、どんどん嬉しくなり達成感などが芽生えてくるようになりました。剣道を通した経験の中で、挨拶や、仲間との絆など、技術以外のことをたくさん学びました。

現在、私は高校で剣道をしています。まだまだ練習の中で自分の精一杯を出し切ることができないまま、まだあると思っていた剣道生活が新型コロナウイルスの影響で、一瞬にして奪われてしまいました。今まで不自由なく剣道が出来ていた、ありがたみをすごく感じました。チームメイト、顧問の先生、稽古する場所、両親に感謝し、これからまた剣道ができるときには、一生懸命取り組んでいきたいと思います。

高校に入学して今日までを、あっという間に感じています。「まだある、もうちょっとし

てから頑張ろうでは手遅れだ」そう言っていた先生の言葉が今になってようやく理解出来ました。これからは、未来の自分が後悔することがないように、今の自分がやり直しのきかないこの一瞬を、一生懸命に取り組もうと思います。

◎大学生の部

●大西 直（香川大学1年）題名「自粛と剣道」

今回の新型コロナウイルスの影響で、現在最低でも三か月もの活動自粛が強いられている。このような状況は私が15年剣道をやってきた中でも経験のないことだ。インフルエンザが流行ったとしても、おおよそ1週間。前例のない状況下でも自分の剣道を磨こうとする、剣道を模索していくことが今やるべきこと、できることだと考える。

私が小、中学生の時に所属していた剣道会の会長の言葉がよくおっしゃっていた言葉の中に、一以貫之という言葉がある。この言葉の意味は文字通り、一つの思いを貫き通すということだ。今この状況にこの言葉を置き換え、私なりの解釈をすると、剣道は剣道をするだけで剣道ではない、剣道について自分が思い考えることが重要なのだ。私たち剣道と磨こうとするものは、初めに何かしらの意思をもって剣道に取り組む。技術の向上や、精神の鍛練など、そういった初心をこの状況でも持ち続けること、その心を持ち続けながら素振りや、筋トレ、体力づくり、動画を見て相手の技を盗むなど、この心をもって行動するとおのずと、今やるべきことや、今できることが見えてくるのではないだろうか。

戦後の剣道ができなかった期間に剣道が絶えず、今まで活動が続けられているのは、先人たちが高い意識をもって、何かしら目に見えない形で剣道を続けてきたからである。状況は違えど、私たちは世界的に苦しい状況下でも高い意識を持ちながら活動再開に向けて、剣道の向上に励むべきだと考える。

●谷本理緒（香川大学3年）題名「できなくなって分かったこと」

私は剣道が嫌いだ。何百回やめようと思ったかしのれない。しんどい、楽しくない、遊ぶ時間がない、勝てない、センスがない。浮かぶのはいつも剣道へのマイナスの気持ちだった。兄の影響で、保育園生の時から竹刀を握り、大学三年生になるまで約15年間剣道を続けてきた。稽古がある日は常に憂鬱な気持ち。正直なところ、試合・練習試合が中止となり、部活までが再開のめどが立たない長期休業となった時、私は内心大喜びだった。あの苦痛の時間から解放される、毎日自由なのだ、と思うと開放的な気持ちになった。

しかし、竹刀を握らなくなった三か月間を思い返してみると剣道のことを忘れた日はなかった。気付けば剣道の動画を見ていたり、再開した時のことを考えたり、防具の手入れをしたり、連絡を取る人たちと剣道の話をしたり。大嫌いで、何度もやめたいと思ったはずなのに、毎日剣道のことを思っていた。

剣道をやってはいけないと言われたのは、剣道生活の中で初めてのことだった。この期間、私は初めてじっくり剣道と向き合い、ここまで剣道が続けてこられた理由に気付くことができた気がする。つらいことを一緒に乗り越えたからこそ、深い絆で結ばれている友人たちがいること。自分や家族の時間を犠牲にしなが、自分たちのために尽くしてくれた恩師の先生方の存在。金銭的にも精神的にも支えてくれた家族の存在。スランプや苦しさを乗り越えて勝利を勝ち取れた時の喜び。私は、とても恵まれた環境で育ち、沢山の方たちと出会い、様々な経験をさせてもらった。悔しい思いもうれしい気持ちも、感謝の気持ちも、全て剣道から学んだ。私の人生は、剣道なしでは語れない。

剣道ができなくなって、この期間があったからこそ大切なことに気付けた。自分の人生を豊かにしてくれた剣道。「私は剣道が大好きだ、早く剣道がしたい。」今は、心からそう思える。

◎指導者の部

●上村 美穂（三木剣道スポーツ少年団）題名「やっぱり剣道が好き」

私が剣道を始めたきっかけは、わが子たち。小学二年生の長男と、次男は就学前でした。主人も小学生から剣道をしていたので、家族一緒にできる競技はどう？と友人に誘われたのもあり、子供たちがスポーツ少年団に入団。そこで主人も指導者として参加、残された私は他の保護者と見学していましたが、せつかくなら体を動かし、基礎を学んで一緒に剣道を始めては、という勧めもあり始めました。元々文化部で運動が苦手、基礎的な動きもままなりません。しかし、子供たちと頑張り、先生方の指導のもと、だんだんと剣道を知るほどに剣道の奥の深さや面白さを感じられるようになりました。剣道をしていなければ得られなかったものは技術や体力的なものも勿論ですが、剣道の古来からの精神、礼儀作法、そして、剣道に携わる人たちとの人間関係です。

剣道を始めて10年近く、自らの都合でできない年もありましたが、2020年、新型コロナウイルス感染症が世界に流行しました。初めて、「したいのにできない」という状況に陥り、ステイホームを余儀なくされ、週3日行っていた稽古も行けなくなりました。その間、改めて剣道について考える時間が出来ました。今、自分にできること。素振り、剣道形、剣道についての勉強、インターネットで動画を見、指導について考える。それから？やはり、剣道は自己の修練とともに、相手あつての心・技・体の向上が望めるのであって、今の状況では限界があります。

私は、剣道が好きです。決して上手でもなく、勝つこともできないけれど、人と関わって自己を磨く、高めていける剣道が、やっぱり大好きです。これからも子どもたちにその素晴らしさを伝えるお手伝いが出来ればと思っています。

●小山 順子（玉藻中学校）題名「生徒、わが師」

剣道を始めていつの間にか長年が過ぎ、現在は玉藻中学校で自称？ホワイトエンジェルズとして河村先生とペアで剣道部の顧問をしています。

従兄弟へのライバル意識から始めた剣道ですが、先輩や同級生、後輩、先生方に憧れ、今でも剣道が続いているのだと思います。玉藻中学校では男子7名、女子6名の部員がいます。その半数は、中学校で剣道を始めました。初心者指導の中では、色々な「へえ！」があります。「竹刀で人をたたくのが怖い」、「面を着けると世界が狭くなって寂しい」など、長く剣道をしていると忘れていた感覚です。「体当たりをするのが怖い」なるほど、日常生活で人にぶつかってはいけないんだよね。うちの部でそんな生徒たちが3年間剣道に取り組み、成果を上げている理由は上級生の存在です。経験の有無にかかわらず、上手にアドバイスをしながら指導しています。時には、私たちよりずっと上手だなと感じます。また、練習や試合の中でお互いアドバイスし合ったり、賞賛したりする場面がよく見られます。常に安定した気持ちで周囲に接することで安心感を醸し出す生徒、自分が厳しい役を引き受けてチームを引き締める生徒、いつも工夫しながら稽古する生徒など、それぞれの剣道への取り組みに頭が下がる思いです。また、今年の稽古始めには大学生や社会人になった先輩も来てくれました。本当にありがたい限りです。

コロナウイルス感染防止対策で多くの大会が中止となり、彼らの努力を発揮できる場面が危機的な状況ですが、部活動の中で学んだ人とのつながりや、自分がすべきことを自分で決めて実践する力、剛い（つよい）気持ちなどを将来に活かして欲しいと願っています。

●久保 泰博（高松第一高等学校）題名「一期一会」

新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、インターハイ、四国大会の中止が次々と決定していった。そしてとうとう県総体も中止となった。そのような中、高体連の各専門部では、3年生に何とか集大成の場をと、代替大会を模索している。一方、生徒達の中には、進路実現や次のステージ向けての不安を感じる人もおり、今後再開される部活動に未練を残しながらも自分でけじめをつけ、稽古や練習を続けることを断念する仲間もいる状況である。

先日、一高剣道部3年生の決断を確認したが、多くの生徒が代替大会まで活動を継続することを断念した。どんな決断でも彼らを支え、応援し「自分は背中を押すのみ」と心に決めていたところがあったが、正直な気持ち、寂しさや、コロナウイルスに対するやり場のない怒りが拭い去れず、複雑な思いで、何日も落ち込んでいた。その中で、ある部員のLINEのメッセージにハッと思わされたことがあった。それは「代替大会に出たいという思いは強いが、受験勉強を優先する。試合で結果を残すことよりも、これまでの過程が大切だと考えているので後悔はない」というものだった。

現代剣道は多くの人に親しまれている。一方で私は、剣道の「ルーツ」は命のやりとりで

あり、いつ命を落とすかもしれない中で培われた技術や思想、文化性は他のスポーツと一線を画していると考えていた。しかし、稽古ができて当たり前と思っていた日々や、ともに汗を流し、仲間と夢の舞台へ出場しようと思ってきた思いを、実際に今、不意に奪われ、果たして自分は、メッセージをくれた彼のように、これまでの自分が歩んできた道に悔いは無いと受け止められる「命懸けの真剣さ」を持っていただろうかと考えさせられた。私は、今回のコロナウィルス禍の中で、生徒から改めて剣道の厳しさを教えられたように思う。

これから、少しでも早く剣道が再開されることを切望するとともに、「一期一会」を忘れず、日々の生活とそこにある剣道に、真剣に精進していこうと思う。最後にこの場をお借りして… 一高剣道部3年生諸君へ ありがとう、そして、がんばろう